414
A 125
5

第百九十号

六月三十日「ジャパンヘラルト」抄譯

近時新任セル支那委員ハ日本人ヲシテ退去セシムルノ命ヲ受ケタリ且云願クハ穏便ノ商議ニ及フヘシト雖モ時宜止ムヲ得サルニ至リテハ兵力ヲ以テ之レヲ處スヘシト其形況実ニ奇異ナルニ至ル今一二ノ言ヲ述ヘンニ日本人ノ臺征ヲ行フヤ自ラ以為ラク支那ノ委員ヲ撰ムハ以テ我兵ヲ援ルヨリ他ナラスト然ルニ支那ノ之レヲ撰擇スルハ日本人ヲ説諭シ到底其策ヲ止メシメンカ為ナリ只支那ハ日本人ト商議

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

センカ為メ此吏人ヲ撰擇セリト云フニ至リテハ兩國意見相異ナル無キノミ且ツ支那地方官吏ハ果シテ日本ニ抗敵スル意アリ又タ日本ノ臺灣領ヲ侵擾セシヲ宥恕スルノ説ヲ賤ヤシムイ疑ヲ容レズ今只疑團ヲ抱クモノハ到底ノ決局ニアリ蓋又タ其決局ノ成敗ハ日本人ノ此擧策ヲナセル深淺ニアルノミ支那ハ元ヨリ日本ノ派出セル何等ノ兵モ乍チ之ヲ勦滅セントス且又タ海兵ノ事ニ於テハ無根狂妄ノ誇ヲナセリ夫レ日本兵ノ驅逐セラルヘキハ或ハ然ラサルニアラサルヘシト蚩モ百戰百勝ノ利アリテ之レヲ驅逐スルヲ得ルヤ否ニ於テヤ之レヲ確明セス今儻日本支那ノ間互ニ戰書ヲ投スルニ至ラハ日本海軍ノ兵力ヲ知リ就中侵擾標的ノ毅力ヲ領スルニ至ルヘシ蓋シ横濱在留ノ我國民ハ之レヲ報セン余ヲ以テ之レヲ視レハ支那税鈎ノ職ヲ奉セル外國ノ有司等其所置ニ関スルニ非ズンハ日本人ハ船艦トシテ勝タサルハナク砲門トシテ利アラサルハナカラン且夫レ事平定ニ至ラサルノ間ハ戰鬪ヲ好マス和ヲ

講セント欲スル者大ニ困難ナラン
余聞ク支那政府ハ日本人ニ蕃地退去ノ命ヲ下
タスヘキニ決シ風港武庫司ノ提督シヤンホス
ンハ日本人ト此事務ヲ商議スヘキ委員ノ命ヲ
拜セリト蓋シ此任ハ穏便ニ日本人ヲ退去セシ
メントスル目前ノ策ニシテ若シ商議決セスン
ハ元ヨリ干戈ヲ動カスニ至ルヘシ此時ニ膺リ
テヤシヤン氏ハ又タ軍事都督ノ命ヲ拜スヘシ
支那人ハ大ニ茲ニ着目シ日本人ノ所為ヲ駭シ
大ニ戰ハンヲ欲セリ又タ此地ニ於テハ大ニ銃
器彈丸等ヲ買込ム是ニ於テ軍需ノ貯アル者ハ
大ニ洪利ヲ得ルニ至レリ支那人ハ云フ日本人
臺灣ヘ進擊前歇止スヘキ命ヲ與ヘタリト然ル
ニカントンニ於テ未タ此基征ヲ止ムルノ所置
ヲ施サヽルニ蕃地ヨリ報アリテ云日本人ト土
人ノ間既ニ兵ヲ交ヘリト今夫レ支那ノ兵未タ
戰地ニ出發セス又タフクトウシウヘラルド新聞ニ
載スル所ヲ以テ之レヲ視レハ支那政府ノ行為
ハ外國人ヲシテ一帝國ト仰カシムルニ足ラス
然リト雖モ若支那ノ苍談信スルニ足ラハ一時

ノ穏便ハ却テ激戰トナルモ謀ルヘカラス蓋シ
北京有司征臺ノ擧アル支那有司ノ曾テ之レヲ
認知セサル旨ヲワツト氏ニ告示セシハ支那政
府ノ立トコロニ和ヲ講セントスルノ證タル(推)カ
シテ知ルヘシ

六月三十日ジヤパンガゼット抄訳

臺灣戰爭ノ記

福州ヨリ報アリテ云日本ノ鐵甲艦其港口ヲ封
圍シ砲艦ノ出岸ヲ得サラシメントス且ツ御門
ノ船艦臺灣進發ノ命ヲ得去リテパゴダノ碇泊
地ニ赴クト(チヤイナメールニ記載セリ)

臺灣

今ヤ人皆相競テ臺島ノ事ニ耳目ヲ注ケハ前キ
ニ刊行セル我國領事ヲ臺灣事情ヲ演說セシモ
ノ或ハ稗益トナルアリ領事パレゴリー氏ハ蕃

族ノ外人ヲ待セル現今ノ形狀ヲ示シ且ツレゼ
ンドル氏ガ前年首長トヽキトヽクト條約ヲ結
ヒ尓來外國ノ漂客ニ遇フモ殘暴ノ擧ヲ為サヽ
ランヿヲ誓ハシメシ以來相変革セル事情ヲ述
フ曰ク一千八百七十二年トヽキトヽクノ渡ス
ルニ方リテヤ其弟之レニ嗣タルヘシト雖モ既
ニ又タ死去セルヲ以テ其姪トクトツタ立テ首
長トナル時ニ蕃人評シテ云我首長ノ死ニ就ク
モノハ領事レゼントル其他外邦人ヨリ礼物
ヲ受クレニ依ルト蓋シ其礼物ハ收者ヲシテ不
祥ノ災ヲ蒙ラシムヘキ密隱ノ功驗アル者トス
故ニ外人ヲ嫌疑スル甚タシク或ハ云外國ノ礼
物ヲ負擔セル一婦人作チ死ニ遇ヒタリト蓋シ
グレゴリー氏ノ報文ハ一千八百七十三年ノ始
メナレハ今述フル處ノモノハ纔カニ一周歲前
ノ形狀ナリ是レニ由テ之レヲ視レハ蕃族ノ日
本人ト商議スル意ヽキハ推シテ知ルヘシ日本
人ノ登岸スルヤ其野心アルヤ否ヲ認知スルニ
及ハス乍チ其先鋒ヲ襲擊スト又怪ムニ足ラサ
ルナリグレゴリー氏ハ全ク相反セル形狀ヲ陳

述セリ曰ク千八百七十二年五月六日九名ノ琉
球人漂到シテ蕃族ノ捕ニ就クヤ廣東ノハカ之
レヲ救援シテ臺湾ニ送リ遂ニ福州ニ至ルヲ得
タリ然ラハ則チ琉球人ノ謝スヘキハカ氏ニ
シテ土人ニ非ス蓋シ土人ハハカ氏ノ威信ニ服
シテ其囚ヲ放チシノミ

長沼熊太郎訳